
陰咲君はお供

村人 S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰咲君はお供

【Nコード】

N0743BA

【作者名】

村人S

【あらすじ】

あらすじ？そうだななんか冷めてる主人公が勇者のお供として頑張って行くかもしれないよ「え？かも？がんばってくれよ空」「気が向いたらな」

こんな話

残酷な描写は一応入れただけ

他に似てる小説などがあっても、これは自分で考えています。

なんか呼ばれた（前書き）

これは私が初めて書いた小説です。
面白くなかったら途中で見るのをやめても構いません
が、できれば見てください

なんか呼ばれた

とりあえず自己紹介をしよう。俺の名前は陰咲空だ。容姿、頭脳ともに普通の男。

そんな俺には何でもできる幼馴染がいる。

その幼馴染の名前は冬介皐月という。この男はさつきも言った通り何でもできる勉強スポーツ何でもござれだ。しかも顔もいいからモテまくる。俺はこいつが嫌いだ。静かなところに居たいのに騒がしいところに連れてかれるし面倒事にも巻き込まれたことがある

そんな皐月がいきなり休日に今日遊ぼうと言ってきた。出来れば断りたいが親が皐月を気に入ってるので断ると家を追い出される。え？普通こんなじゃ追い出されない？前遊ぶのを断ったら追い出されたんだ追い出されるのもうわかってる。

で、遊ぶのがアイツの家だ。しょうがなく行くと皐月は何する？と言い出した。

遊ぶことを決めてから呼べよ。でもそう思っていることを長年頑張ってたやつと今年やることができるようになったポーカーフェイスで隠し、ゲームでもやろうぜと言った。

遊ぶことが決まりさあ遊ぼうと思った瞬間俺と皐月は白いものに包まれた。

そして、まぶしさが消えたので目を開けてみると人がいっぱいいた。数えてみると27人だ。

次に皐月を探してみると足元でまだ寝ていた。

取りあえず皐月を蹴って起こし、話をする。蹴ったとき何人かがないか言ってたが無視だ

「おい皐月起きたか？」

「ああ起きたが蹴って起こすなって前から言っただじゃないか」

「そんなこと言ってたか？まあいいこれはなんだ？」

「これ？つてなんだここ！？」

今きずいたようだ使えんと思つて一人が話してきた

「あの、どっちが勇者様ですか？」

何言つてるんだ？こいつは取りあえずは面倒事は消そう

「こいつです」

そう言つて臯月を指さす。

「え？」

なんかこいつが言つてたがあつちがそれを遮つていった

「なるほど、ならあなたは誰ですか？」

しるかよそんなこと

「しらねえよそんなもん。ここがどこかもわからねえのによ」

「あれ？お前そんなに口悪かつたつけ？」

なんかこいつが言つてくる。だがそんなことは無視

「ここがどこだか知らないが俺は帰れるのか？」

「いえ、この魔法陣は呼ぶ専門です。」

「あ？魔法陣？てか帰れねえのかよ」

正直家に帰つてもやることなんてゲームとパソコンくらいだがな

「それで勇者様、王様にあつてくれませんか？」

「ああいいけど、俺だけ？」

「いえ、もう一人の方も来てください」

名前は言つてないがさすがに方はないだろ。まあいい

「まあいいが」

そう言つてあとは臯月に任せることにした。ああ言い忘れてたがい

まいるところは15M位の部屋だなんか薄暗い

「ではついてきてください」

言われたのでついていくなんか臯月が全く分かつてないが引きずる。というかこんな頭の回転遅い奴だったか？こいつ。そう思つているとついたらしい

「では入ってください」

入つてみるとそこは金をふんだんに使つたような俺の嫌いな場所を

体現するようだった。

王の前に行くと王は意外とイケメンだったが残念ながらその長点を台無しにするかのように太っていた

「勇者よこの世界は魔王に襲われておる、助けてくれないか？」

目の前にいるのにガン無視される俺、正直帰っていいか？そう思いながら王と皐月の話を聞き流しているとなんか決まったらしい聞いてみるとこんな感じだ。皐月は魔王を倒しに行く俺は強制的にお供Aポジションだ。目立ちたいわけじゃないがこれはひどくないか？それと今から訓練するらしい

訓練で何とかなる相手ならお前らで何とかしてほしいものだ

なんか呼ばれた（後書き）

ここまで見てくれてありがとうございます！

誤字脱字はバンバン言ってください

更新はできるだけ毎日やっています。

冬休みが終わったら少なくなるかもしれませんがね

訓練1（前書き）

二話目です

これは戦いの訓練です

訓練 1

これから訓練を開始するといわれたからしようがなく訓練所間での道のりを歩いている俺はこれから何を考えるのかを考えていた。取りあえず現実？のほうでは野球をしてたから少しは動けるがきつい運動とかはなければいいんだが普通こういうのはほとんどきついやつばかりと相場が決まっている。はあ

そういえばこの世界は魔法があるらしい。と言っても魔法陣がある時点で気づいてるかもしれないがな

だから魔法の練習ならいいなと思っている。なぜなら動かなそうだからだ。

そう思っていると訓練所についた。さあ行こうかと思った瞬間裏から声が聞こえた

「お、空！もう来てたのか、訓練が楽しみなのか？俺は楽しみで夜寝れなかったぜ！」

「それはお前だけだアホが。俺はぐっすり寝れたはボケ。てか訓練が楽しみとかそんなに戦いたいのか？」

「当然だ！早くこの世界を救ってやらないと」

「ふーんどうでもいいけど……早く行くぞ？怒られたくないからな面倒だから」

そう言つて俺は歩き出した。と言つてもドアを開けたらあるんだがな。それで、ついて話を聞く

「今日の訓練はお前らの武器を選ぶところから始めるぞ」

そう言われて俺は何にしようか迷つてると武器庫に連れてかれるらしい。いいのがあればいいが。

結構種類はあったが俺は一つの物しか見ていない。なんであるのかは知らないが釘バットだ。

一応何故あるのか聞いてみたが昔からあるとしか言われなかった。昔はどんな国だったんだここは釘バットが10本あったぞ。それで、

皐月は普通に剣を選んだらしい。それでまた訓練所に戻り訓練が始まった

と言っても実践訓練ではなく選んだ武器がどのような物が見るための時間らしい。

なのでいろいろ確かめてみたがこの釘バットはすごく高性能だった。なんせ剣とぶつけてみて剣が折れたのだ。ぶつけたというか切りつけてもらったんだがな。

で、釘が50本刺さってたこのバットだが重さはそこまで変わらななしブンブン振り回してたら時間だといわれた。ここでいきなり実践らしい相手は皐月だ。

「なんでお前なんだよ。はあ、こりゃ負けるかな」

「なんでだ？お前も結構いけるだろ」

「何でもできるお前と平凡な俺とは差があるのさ。じゃ始めるか」
そう言つて審判の代わりの兵に目を向けると意味が分かったのか

「開始！」

と言つてくれた。聞こえた瞬間俺は右に跳んだ。俺がいたところには剣を振り切つてる皐月がいた。

早すぎるだろ！と思つたがすぐに釘バットを前に出した。

ぎりぎり剣をはじけたがめっちゃ手がしびれる取りあえずけりを放つ俺。

だが避けられた。体制の崩れてる俺じゃ避けれない。と、皆が思つたが俺は片足で左に跳んだ。

ぎりぎり避けたがここで俺は倒れた。立とうとしたとこで剣を当てられ俺の負け。

「やっぱ無理か。まあわかつてたしな」

「とゆーかなんで俺の一回目を避けたんだ？結構本気で走つたんだが」

実は最初俺と皐月の間には10M差があつた。

「お前が足早いのは知ってるんだよ。陸上部のエース君」

「その言い方はやめてくれないか？」

「やだね、これがなくなると読者が俺が誰だかわからなくなるかも知らんだろ?」

「読者?」

「で、訓練はこれで終わり?」

そう聞いたら今のを三セットやった後で魔法の訓練をするらしい。

もうわかると思うが4戦4敗だ。これは才能かなんかじゃない気がするなあ。

訓練1（後書き）

面白かったですでしょうか？

今きずいたんですがこの性格だとみる人限られそうですね
誤字脱字がありましたらコメントでお願いします

訓練2（前書き）

三話目です

今回は魔法の練習です

訓練 2

次は魔法の訓練をするらしいが、その前にどんな魔法があるかの勉強かららしい。

取りあえずこれは聞いたほうが良いだろう。なんせ身体能力は軽く野球してたから一般の人よりは少しはあるかな？くらいだ。これで使えないとか言われたら終わる。で、話はその話は 実はまだ終わっている。

考えてたら終わったそうだな。しょうがないからもう一回お願いした。こんな感じらしい。

「魔法の属性から始めます。今度はちゃんと聞いてくださいね？まず、魔法は火、水、風、土があります。また闇や光もあるので、レアなので置いておきます。そして、魔法には攻撃系統のほかには補助系統などたくさんあります。魔法陣などは上級です。使えるのは人によって違うので後で一度やってみます。これくらいわかれば初級は大丈夫です。もっと詳しいことは毎回少しずつ教えていきます。で、何の系統が貴方たちにあっているのか調べようとしたときあなたの聞いてませんでもう一回です。ほんとにはもう何属性があっているかわかっているような時間なのですが、どこかの誰かのせいで・・・まあいいです」

今から始めるので、この水晶に手を当ててください」

そういつて、リサさん（聞いたなら教えてくれた）は水晶を取り出した。明らかに袋のほうが小さいのだが何かあるのだろうか。終わったら聞いてみよう。

まず、皇月が手を当てた。その瞬間水晶が白く発光した。まぶしさで目が痛い。後で殴ろう。

「まさか！これは光！？でも…いや勇者様なら…」

わかっていたがやっぱり光らしい。まあこいつならこれだろう。俺はなんだろうな。目立たず役に立ちそうな風が良いが、まあいいさ

つさとやるかなどうせ俺はレアなんて出ないだろう。

そう思っていた時期が俺にもありました。伏線張ったから闇でねえかな。

そして手を当ててみるとなんと！

なんて無く、まったく光らない・・・才能ないのか？

聞いてみると風らしい。しかし、普通は薄い青に光るらしい。どういう意味か考えて思ったことは二つ

一つは風の才が以上にある。もう一つは逆に無いだ。まあ取りあえず弱くてもほしいのが出たんだ。うれしい限りさ。そう思っているトリサさんが嘲笑っていた。

聞くと、風はこの世界では一番弱いとなっているらしい。風のステイグマを読ませてあげたい。

え？なにそれだって？わからないならググってくれ。

それで、どれくらい才能があるか聞くと、ここまで才能があるのは初めてだが、風じゃあねえと言われた

取りあえず、今日はどんなことができるかやる予定だったらしいが風属性になった人は今まで、なんでだ！と言って鍛えなかったらしく、光は本であるくらいで城にはいないそうだ。

結論は、発動方法は教えるので頑張ってください。とのことだ、やり方はどこにでもいるらしい精霊にお願いをするだけらしい。臯月がやってみたら白い剣ができた。びっくりしてすぐ消してたがな。

俺はまず城がどうなってるかどんな場所か教えろ、と思った瞬間いきなり知らない景色がいつぱい出てきた。石と鉄でできているので城と言うことが分かった。んー索敵とかに使えるな。そう思ったが、びっくりするものが見えた。王と大臣が話してるだけならよかったが、メイドっぽい人が倒れているのだ。

声も聞こえるよ！と思った時、いきなり臯月に話しかけられやめました。

不機嫌になっていると、臯月がいきなり

「風じゃ何もできないのか？だったら釘バットに風をまとわせれば

？」と言つてきやがった。

そんなことより、あの状況で消したせいで何か重要なことを見れたかもしれないのに……とおもっていた俺は、流しておわらせた。

次に風の刃を作つて放てるかの実験は上手く行つたがいきなり端つこの方の壁が切れたので臯月はびっくりしている。リサ？さつき部屋を出てつたが？

最後に飛べるのか？と気配を薄くできるか？の二つをやつた。

飛ぶほうはできたが、気配の方はほとんどできず、お前なんか変わったか？くらいだった。

訓練2（後書き）

全部1400前後くらい書いてるんだけどもつと書いた方がイイかな？

取りあえず誤字脱字はコメでお願いします

飯キター（前書き）

四話目です。

次あたりにステータスとか書こうと思ってるよ

飯キター

訓練が終わり飯の時間らしい。実はこの世界のご飯はまだ食べていない。

普通は訓練は次の日じゃないか？と思ったがその時は魔法に興味が行ってたから言うのを忘れていたんだ

え？訓練の最後に皐月が来てた？そりゃあいつは動きにくい服装だったからな。

実はアイツの家って金持ちなんだ。めっちゃ動きを制限されてたよ？まあそんなことはいいんだ。話を戻すんだが実際ならってみて結構使えるのでよかった。

それで飯を食べるために食堂に移動しているんだが、遠い。

なんか食べてるときくらい静かにしていたいのに、訓練所が近くにあったらだめだ！

と、四代くらい前の勇者が言ったらしい。マジでふざけるな。

そう思ってもここにできてしまっているのもう変える事は出来ない。

もう訓練所を出て10分は歩いたね。まあ食堂と部屋が近いのだけは救いだ。

どっちにしろ起きてから訓練所までが遠いことを意味するんだがな。と考えてたらついたようだ。取りあえず入ってみると想像してたものとは違かった。

普通城だったら長い机に座って食べるとかじゃないのか？

なんで学校みたいなんだ。

食べればいいがな。で、ついたのは訓練が終わってから15分くらいたってからだ。

なのに、なぜ？今ご飯を作り始めるんだ。

ご飯を食べた時おいしかったからいいがな。

どんなのが出たか？そうだな、かつ丼にうどんを足してそこから焼

いたような感じだ

想像できるか？できないだろうな。俺も見るまでないと思ってた。で、部屋に行っただがすごく豪華だった。勇者に付き添ってるだけの俺でここまで豪華なんだ

皐月はどんくらいかな？そう思っていたらノックされた。入っていいと告げると入ってきたのは

皐月だった。なんでお前なんだよ。そう思ったが一応

「どうした？一人じゃ寂しくて死ぬと思ってきたか？」

と言ってやった。

「いや、そんなんじゃないよ。暇だったし一緒に簡単な魔法の練習でもないか？とも思ってたね」

「しらねえよ。と言いたいところだがドアにメイドがいるからないよ」

とオーケーを出す。

「まずは何をする？」

考えてから来いよお前はよおと思ったが

「二人がやれることを探してみるか、紙とペンはいつも持ってるからあるよ」

そういつて出した。ああいつも持ち歩いてるのは嘘だ

実はさつき部屋の引き出しにあったのをとった。

「じゃあまず空のからな。そうだなあ風で周りを探索とかよくない？」

「もうやった」

「えっ、じゃあ風を自分に纏わせて防御とか」

「やってみる」

そう言ってやり始めた空。紙いらねえな

「できるな。ついでに飛ぶときは風を白い羽っぽくして飛ぶか」

「え？空って飛べたのか？」

「訓練の時風で飛んだろ？覚えてるよ」

「悪いな。であとはどうする？俺はもうおもいつかないよ？」

「俺もない。よって次はお前のだ」

「んーじゃあ光で目くらましは？」

「それは光を出してるだけだボケ。せめて光で目をくらませて相手が目を閉じる前に残留でも目に入れろよオイ。そんなくらしねえとすぐに相手は立ち直るはアホ。歴戦なら目を閉じて気配で苦留はバカ。やるならそんなことができる奴にも対抗できねえとダメだわクズ。わかったら目くらましだめはやめろ」

と、言いたかったんだがいいんじゃない？と肯定した。

「なんか裏でいろいろ考えてそうだけどこれはOKだな？じゃあ次はー」

ここまで行つたとき、いきなり窓が開いて

「空殿はどちらだ？貴殿の命もらいあげに来た！」

とか言ってる馬鹿が来た。まあ臯月に任せりや何とかなるだろ

そう思ってたのに

「おい空どうする？」

と焦った表情でばらしやがった。せめてここにはいないよくらい言えよ

そう思っていたら、なんかナイフ投げてきた。はじいたけどな。皿で。なんであるか？持ってきたに決まってんじゃない。

飯キター（後書き）

誤字脱字はよろしく

コメ待ってます。

質問とかがコメで来たらあとがきでみるよ

ステータス（臨時更新）（前書き）

五話目！

ステータス（臨時更新）

主人公

陰咲空

性格：冷めてるが作者のせいで表せてない。根は結構いいやつだがそこまでさらさない。

魔法属性： 風90% ??10%

使用武器：釘バット（黒）

冬介皐月

性格：熱血漢＋前向き＋お人好しⅡのような感じ

魔法属性： 光100%

使用武器：剣

リサ

性格：この世界での普通の魔法使いをそのまま

魔法属性： 水100%

使用武器：杖 ナイフ

王

性格：結構いい人 空を無視してたのは勇者に一秒でも早く国を救ってほしいから

魔法属性： 火100%

使用武器：落ちてた剣・真

何故か魔王

性格：まだ明かさないよ

魔法属性： 闇100%

使用武器：いろいろだけど基本剣

ステータス（臨時更新）（後書き）

誤字脱字、こついつのをのしたほうが・・・とかはコメでお願いします

追い出された。まあいつか（前書き）

あらずじに嘘はない！

ちゃんと皐月の旅に出れるよう考えてあります。

追い出された。まあいつか

そして、一か月がたった。

早い？時間が飛んだ？俺が負けるのを延々と見たいなら番外で書こうか？

今は、勇者のお披露目をやっている。俺は端で飯食ってるけどなで、食べていると会が終わりに近づいてきた。でなぜかここでお供を紹介するらしい。

普通最初だと思うんだが？なんてのは右の方に投げてくれ。

で、それがこれ。ああ王様が言ってるからね？

「これより、勇者のたびについていく仲間を発表する。一人目は、聖騎士コウロ＝リウだ！」

んでそのコウロって奴が歩いていく。ところで最初じゃないってことは俺って最後？

「次に、大魔法使いユウ＝リナロバアだ！」

こいつは女だ。前あったけどいやなやつだった。どんな奴か？後でわかるさ

「次、賢者ルウ＝リナロバアだ！」

さっきの奴の妹。こいつはまだあったことない。てからパーティーか？

「最後に、僧侶カイト＝クルイルだ！ 以上五人が勇者のパーティーである。わかったな？」

おい、俺は？と思ってたら皐月が

「おい、空は？」

と言ってくれた。嬉しいんだか悲しいんだか。

「空？ 誰だそれは。そんなやついないが？」

俺の存在オワタ（＾＾）／

畜生、なんでこうなった。俺は？帰れないしやることもない。どうすりゃいいんだ？

なんて思っていると王が

「ところで、空という者はここにいるのか？ 関係者以外来てはいけないようにしているのだが」

ここまでくると城から追い出されそうだな。あらずじが詐欺になりそうなんだが・・・

んー、いや行けるか？こんな感じにやれば行けるかもな。そう考えて、臯月に話しかけようとした瞬間

俺は、城を追い出された。意味わからない？勇者になれなれしく話しかけようとしたかららしい。

どうしてこうなった？まあいいや。どうせやりたいことは城に居てもやれないし。まあ都合よくあいつが来ればいいんだがな。

さて、わかってない人がいるなら下の行を見てくれればわかる。なんて思っているうちに目的地に着いた。どこか？ギルドだよ。

中はどっかのゲームみたいで掲示板みたいなのがあり二階建て。受付のところに行くところには期待を裏切るようにむさいおっさんがいた。

「ここで登録できます？」

一応下手に出る。

「初めての方ですか？ 登録はあっちです」

畜生、まあいいや

「ありがとうございます」

そう言っって言われた方に行く。するとそこにはなんとおばさんがいた。

「登録したいんですが」

「はい、できます。登録するんですね？」

「はい」

「じゃあ、このカードに血を垂らしてください」

と、カードを出された。そこに血を垂らすらしい。ところで「ナイフ貸してくれませんか？」

「……はいどうぞ」

少し間が開いたがナイフを貸してくれたそれで指を軽く切って血を垂らす。

「これでいいですか？ あと貸してくれてありがとうございます」

「はい、これであなたはギルドの一人です。説明はいりますか？」

「いや、いいです」

なんて断りたいが、こっちは知識がない。

「お願いします」

これしかない。てか、ほぼ他の小説と同じだと思っただが？これは替えようがない

「まず、ギルドについてです。ギルドと言うのは依頼を受けて依頼をこなし報酬をもらう。簡単に言うとは傭兵と考えてください。しかし、強くない者もたくさんいます。そんな人が強い敵と戦うようなことをしたら死んでしまうかもしれません。なので、皆様にはランクが付きました。このランクはSが一番強くFが一番弱い、というか新入りをさします。それで、自分より一段上まではクエストを受けられますがそれより上は無理。という風にしました。もちろんあなたもFです。何か質問は？」

ちよ、長いようでみじかつ取りあえず質問か。

「えっと、ランクを上げるには何をすれば？」

「それは、自分より上のクエストを一つこなすか自分のランクのクエストを10個こなすと昇格できます

でも、自分より低いクエストは受けても昇格はありません。他にありますか？」

特にないな。

「ありがとうございます。また、何かあったときは質問しますんでお願いします」

「いや、ここ昇格と入るの限定です。受付でしてください」
ちよ、なんだってー

追い出された。まあいつか（後書き）

誤字脱字の報告待ってます

待つものじゃないんですけどね。

まあ、作者の力量がね・・・

よし、これでお供だ（前書き）

一応お供に入りました

まあ、喋ってないですけど。

よし、これでお供だ

さて、前ギルドに入った空だ。

え？空じゃわからない？なんてことはないよな？

で、ギルドでまず、クエストを受ける。何のクエストか？一個上のクエストだ。

出来れば討伐系のがいいな。なんでか？実践の練習だ。

まあ、Eのランクにいいやつなんてないがな。

王道でゴ布林無いかなんて思ってると思つてるとびくりなことがあつた。スライムがある。

え？普通？いやいやクエストの方じゃないぞ？ギルドに普通にいたんだ。

まあ、みんな攻撃しないから置いとくけどな。

受けたクエストはゴ布林狩りのクエストだ。

ある程度倒してほしいらしい。

ゴブリンの姿はそうだな……醜い小人とも思つとけば10%くらいはあつてる。

移動方法？歩きだが？てか今まで何もしゃべってないんだが見にくくないか？これ

つと、話がずれたな。それで、実はもうついてるんだが多いんだ。敵が

一匹見たら30はいると思つて受付で言われたけどさすがに最初つから何十匹いるし、全部で何匹いるんだ？まあ頑張るしかないかなんて思つて釘バットをだした。そして振る。振る。振る。振る。何回振っただろうか？手が痛くなってきた。ああ4回じゃないからな？

最初に出てきていた奴らを倒した。そして、次が来た。

今度は数匹だ。バンバン倒していく。少し時間がたったからもういいな。

そう思つて帰ろうとしたら、裏から攻撃しようとしてたゴブリンと目があつた。

少しの間沈黙してゴブリンは逃げて行つた。

クエストおわりつと。帰るかなあ

で、帰つた。ギルドに着くころには日付が変わつちまつた。

どんくらい遠いか？10km位さ。そんならいならすぐ着く？ならばバットを500回振つて20km往復してみる。めっちゃ疲れるから。もともとそこまで体力ないほうだから俺は。

かえつてクエストをクリアした。報酬の50銀貨をもらい、昇格する。

これで晴れて俺はEランクだ。え？まだそんなん？とかは言わないでくれ。

ああ、お金の単位は札＞白金貨＞金貨＞銀貨＞銅貨の順だ。それで銅貨が100枚で銀貨と交換、銀貨100枚で金貨だ。そんで、金貨100枚で白金貨、白金貨100枚で札と交換できる。

札がどんなのか？そうだな、普通にお札だね。1000円札とかそんなとほぼ同じ。

今俺は50銀貨を持っていて、宿代は10銀貨だ。一番この町で安い宿でな。

普通の人の年間の収入は1金貨〜10金貨くらいだな。

差？仕事が違うからな。

取りあえず、皇月に付いてかんとタイトルがな…まあ、もうチヨイで訓練も終わりだったはずだ。

大体明後日くらいに終わりつて言つてたからその時ついてこつ。それまでにランクを上げてやんよ。

なんて考えていた時期がありました。次の日アイツが旅に出た。まあついていけたけどな。最初からいたお供にいろいろ言われたよ。今のランクはB。持ち金は3金貨だ。布製でいい防具買つたらほぼなくなつた。

武器はまだ釘バットだ。これ結構使える。

よし、これでお供だ（後書き）

サブタイトルが詐欺になってしまいました
まあ、次で頑張るか・・・

さつつんの話：1（前書き）

予告通り泉月サイドです

さつつんの話：1

ドスッ

嫌な音と腹に痛みを感じた。それで俺は起きた。
痛みは空が蹴ったらしい。

「おい臯月起きたか？」

起きたけどさすがに蹴らないでほしい

「ああ起きたが蹴って起こすなって前から言っただじゃないか」

「そんなこと言ってたか？まあいいこれはなんだ？」

「これ？ってなんだここ！？」

周りを見てから気づいたが自分の部屋とはかけ離れていた
なんだここは？と考えていた時、一人の人が話しかけてきた

「あの、どっちが勇者様ですか？」

どういうことだ？勇者？

「こいつです」

考えてたら俺が勇者ということになっていた。

「え？」

「なるほど、ならあなたは誰ですか？」

「しらねえよそんなもん。ここがどこかもわからねえのによ」
「ってこいつここまで口悪かったか？」

「あれ？お前そんなに口悪かったか？」

「ここがここがどこだか知らないが俺は帰れるのか？」
無視するなよ

「いえ、この魔方阵は呼ぶ専門です」

「あ？魔法陣？てか帰れねえのかよ」

「一気に話が進んでいく。というか帰れないのか？」

「それで勇者様、王様とあってくれませんか？」

まあ会っただけならいいけど

「ああいいけど、俺だけ？」

「いえ、もう一人の方も来てください」

「まあいいが」

こいつ顔が歪んでるぞ。方って呼ばれたからか？

まあいいか。

そして、王様のいるところに着いた。

「勇者よこの世界は魔王に襲われておる、助けてくれないか？」

ものすごく、王道だな。でも、助けてと言われたら助けないとな。

「はい、わかりました。ところで、こいつはどうなるんですか？」

「うむ、この城でお主を待ってもらおう」

それは困る。こいつにはお世話になっているからな。待たせるなんて

「いえ、空も一緒に旅に連れて行かせてください」

「ふむ、しょうがないな。ならばその者にも訓練を受けてもらわないとだな」

「はい」

そして、話が終わった

しかし、空は話を聞いてなかったらしい。俺は一から教えてあげたがそれもある程度だけ聞いたらしい

最後に簡単にして納得していた。まあ空がわかるならいいか。

さつつんの話：1（後書き）

長すぎるからここで切ってみた

空じゃないと性格がやりにくいorz

まあしょうがないですね

あと、冬休みが終わっちゃったから毎日更新は無理かもしれません。
見てくれる人がいるか知らないですけど…

PVがそつだな10000に行くなんてないだろうけど

もしもあつたらなんか書きますかね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0743ba/>

陰咲君はお供

2012年1月10日21時45分発行